

平成22年6月1日現在

研究種目：基盤研究（C）
 研究期間：2007 ～ 2009
 課題番号：19520201
 研究課題名（和文） 「視覚」と「触覚」をめぐる言説とメディアのインターフェースに関する研究
 研究課題名（英文） Study on the discourses of visual and haptic perception and interface of the media

研究代表者
 山口 裕之（YAMAGUCHI Hiroyuki）
 東京外国語大学大学院・大学院総合国際学研究院・教授
 研究者番号：40244628

研究成果の概要（和文）：

本研究はまず、近代西欧の思想史のなかで形成された、「視覚」と「触覚」という対概念を特徴とする知覚の言説の展開を明らかにした。「視覚」は基本的に理性的認識にかかわるのに対して、「触覚」は全感覚による世界の原初的な経験につながる。ベンヤミンやマクルーハンといった20世紀のメディア思想家にとって、「触覚」はさらに、新たな技術メディアによって生み出される仮想的感覚性とも結びついている。この考察を現代のハイパーテキストの理念モデルに敷衍するならば、広義の「ハイパーテキスト」は、われわれの文化のなかで、「触覚」をめぐる言説の延長上に位置づけることができる。

研究成果の概要（英文）：

This study gives at first an overview about the discourses of the perceptions which have been formed in the modern European thought above all with the key concepts of the "visual" and "tactile" perception. In this tradition, visual perception relates basically to the knowledge given by reason, whereas the tactile perception has been sometimes connected with the original experience of the world, as it were, in the unity of all senses. For media theorists in the 20th century as Walter Benjamin or Marshall McLuhan, the tactile perception can moreover be connected with virtual perception given by the new technical media. Applying this contemplation to the present conception of the hypertext as a model, hypertext in the broader sense can be understood in the context of the discourses of the tactile perception.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2007年度	1,110,000	330,000	1,430,000
2008年度	600,000	180,000	780,000
2009年度	600,000	180,000	780,000
年度			
年度			
総計	2,310,000	690,000	2,990,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：文学・ヨーロッパ文学

キーワード：知覚、視覚、触覚、メディア、メディア論、ベンヤミン、マクルーハン、ハイパーテキスト

1. 研究開始当初の背景

(1) 研究代表者の専門とするベンヤミンのメディア的思想において、「視覚」と「触覚」という対概念は非常に重要な問題と思われたが、これについてはこれまで十分に研究されていると思われなかった。

(2) ハイパーテキストの理念的コンセプトに関わる問題は、研究代表者のベンヤミン研究の延長上で大きな意味をもっているが、ここではとりわけ「触覚」の問題が重要性をもつと予想された。

2. 研究の目的

本研究における根本的な関心は、知覚と技術との関係を明らかにすることにある。こういった問題は、技術者にとってきわめて実際的な関心事項であるが、このことを人文研究者の側から、人間の文化のコンテクストにおいて考察することが、ここでの中心的な目的である。

こういった根本的な関心に基づいて、本研究では主に以下の三つの具体的な目的を掲げている。

(1) 主に 18 世紀以降の知覚（と芸術の関係）をめぐる言説（ロック、ライプニッツ、バークリー、コンディヤック、デイドロ、ヘルダー、カント、フィードラー、ヒルデブラント、リーゲル）からベンヤミンを経てマクルーハンにいたるまで共通して見られる、「視覚」と「触覚／聴覚」という二項対立的な知覚の把握の系譜を明らかにする。

(2) ベンヤミンにおける「視覚」「触覚」という対概念が、知覚の言説の展開のなかになどのように位置づけられるものであるかを明らかにし、それによってベンヤミンのこのキー概念を彼の思考のなかでどのような意味をもつものであるかを明らかにする。

(3) 「触覚／聴覚」の系列に属するニューメディア（とりわけハイパーテキスト）のインターフェースが、知覚のアクセントの転換にともなってどのような方向に形成されつつあり、そしてそれがわれわれの認識・思考のあり方・文化の総体をどのように規定しているかについて考察する。

3. 研究の方法

上記の「目的」で述べた三つの目的に対応す

るかたちで、次の三つの具体的な作業を設定した。

(1) 18 世紀以降の思想史、美術理論史における「視覚」と「触覚」という二項対立的な知覚の把握の系譜の整理

(2) ベンヤミンの『複製技術時代の芸術作品』における「視覚」・「触覚」概念と、(1) の思想史的系譜との関係の考察

(3) 人文的インターフェース論の構築：「視覚」と「触覚」をめぐる言説（ベンヤミン、マクルーハンを含む）を技術メディア（とりわけハイパーテキスト）の理論と関係づける

(1) については、関連する思想的テキストの読解とそれに関する二次文献の読解と整理により、「視覚」と「触覚」をめぐる展開された言説の場を描き出すことになった。その際、ベンヤミン、マクルーハン、そしてインターフェースの問題へとつなげてゆくことをつねに念頭を置くことになる。（この点が、従来の「視覚」・「触覚」をめぐる研究とは大きく異なる。）

ここで取り上げた主要なテキストは、以下のものである。ジョナサン・クレーリー『観察者の系譜』、Michael J. Morgan, Molyneux's Question: Vision, Touch and the Philosophy of Perception. New York and London, Cambridge University Press, 1977; Gareth Evans, Molyneux's Question. In: G. Evans, Collected Papers, Oxford: Clarendon Press, 1985、ジョン・ロック『人間知性論』、ライプニッツ『人間知性新論』、G. バークリー『視覚新論』、コンディヤック『人間認識起源論』、『感覚論』、デイドロ『盲人書簡』、ヘルダー『批評論叢』、『彫塑』、『言語起源論』、フィードラー『芸術活動の根源』、ヒルデブラント『造形芸術における形の問題』、リーゲル『末期ローマの芸術産業』、ベンヤミン『複製技術時代の芸術作品』、マクルーハン『グーテンベルクの銀河系』。

(2) については、(1) の成果に基づいて、基本的に『複製技術時代の芸術作品』の再読が中心となった。

(3) については、以下の三つの作業を設定した。

①ハイパーテキストの理念・歴史的展開の考察を出発点としながら、インターフェースに

関する基本的発想を整理する。

②「視覚」と「触覚」をめぐる二項対立的言説を枠組みとしながら、「触覚」の概念を主にハイパーテキストにおけるインターフェースの問題に関連づけて考察する。

③技術的・実践的視点からのハイパーテキストの発想を、人文的な知の転換というコンテキストにおけるハイパーテキストのコンセプトと関連づける。

4. 研究成果

(1) 本研究はまず、近代西欧の思想史のなかで、「視覚」と「触覚」が特殊な対概念的となって、どのような知覚の言説を形成してきたかを整理した。

このテーマに関する従来の研究では、ロックの『人間知性論』に端を発するいわゆる「モリヌクス問題」が、主に経験論、啓蒙主義の哲学の流れの中でどのように受容され、変容していったかに焦点が当てられているが、本研究ではこの問題を、ヘルダーの思想や美術史における知覚の問題（フィードラー、ヒルデブラント、リーグル）にまで広げて考察することによって、さらに幅広い射程で位置づけようと試みた。

モリヌクス問題で取り上げられている思考実験に見て取ることができるのは、知覚の統合と経験の関係という当初のコンテキストを超えて、知覚の分断がそもそもどのような意味をもつことになるかという問題である。このことは、カメラ・オブスクラという視覚のみを身体の外に外在化する技術的なモデルによってすでに顕在化していた。直接的な身体経験においては、対象は統合的に体験されていたのに対して、視覚だけが分断される時、対象の実在性に対する保証は失われる。知覚の言説において、一般的に「視覚」は理性的認識に、「触覚」は全感覚的・実在的な対象の認識に関係づけてとらえられているが、合理主義的・理性的思考のパラダイムが優位を占める西欧近代において「視覚」が突出した重要性をもつことには変わりはないにせよ、知覚の分断によって生じた実在性への信頼の動揺のために、他方では「触覚」優位の思想が展開されていくことになる。バークリーやヘルダーには、そのことが顕著に見て取れる。

19世紀の芸術思想（フィードラー、ヒルデブラント、リーグル）においては、技術の進展のために、知覚の分断はさらに大きなものとなり、知覚の確実性に対する同様がさまざまなかたちで表面化していることを見て取れる。このことは、例えばジョナサン・クレーリーの『観察者の系譜』で提示されている

ような、「視覚」におけるパラダイム転換とパラレルにとらえることもできるだろう。

(2) ベンヤミンが複製技術論のなかで「触覚的」という言葉を最初に使う箇所では、単に現象的な意味で、映画の「触覚的」特質に言及しているようにも見える。しかし、他の箇所では「アウラ」に対置される「ショック経験」と結びつけられており、これまで多くの研究ではベンヤミンのいう「触覚」は、思想史における伝統的な「触覚」の位置づけとは反対に、アウラの経験の対極にあるものととらえられてきた。しかし、そうではなく、ベンヤミンにおける「触覚」も、それまでの思想的な位置づけに基づきつつ、彼が「映画」のうちに見出した、技術メディアによる新たな芸術の特質（「ショック経験」）にも重ね合わされていると考えることができる。これは、根源的なものを指し示しつつ、新たな発展段階を志向するベンヤミンの弁証法的思考の一つの顕著な表れであるが、こういった思考法は、実はマクルーハンのメディア論とも重なり合うものである。

技術と触覚をめぐる問題は、ベンヤミンにおいては「集団的身体」という特殊な概念としても現れる。ベンヤミンは、ユングの「集団的無意識」を念頭に置きながらこの概念を展開するとともに、それに対応する「集団的身体」という概念を想定する（とくに「シュレアリズム」論）。そのような身体を実在的に考えることができない以上、「集団的身体」のためには、「集団的無意識」以上に、媒介となる技術性が要請される。「触覚」の概念は、こういったコンテキストにおいても新たな意味をもつことになる。

(3) ハイパーテキストは、もともとテキストの構造を記述する言語として生まれた。しかし、実際にハイパーテキストが広く用いられていく過程で、テキストの論理構造の記述から画像性の比重の圧倒的増大へという基本的な変化の方向を見てとることができる。これは、ベンヤミンがしばしば指摘するような、メディアの過渡期（あるいは「衰退期」）の現象ということができるが、基本的にハイパーテキストは、「文字」（テキスト）という旧来のメディアの非順序的リンクではなく、「画像」の非順序的、網目的なリンクによる新たな画像性を志向する、新たなパラダイムのもとに成立するメディアとして位置づけることができる。この「画像性」は、「文字」という記号的コードによる理性的認識と結びついた「視覚」と関係づけられるものではなく、むしろ模倣的コードによる全感覚的な把握を体現する「触覚」と関わるものである。このことは、現象的には、例えばコンピュータのインターフェースにおける触覚性にも

見て取れる。この新たなパラダイムは、「文字」メディアによって生み出された「教養」「精神性」といった価値とは、対極にあるものを志向するが、それは決して文化の退化を意味するものではない。

ベンヤミンが、すでに彼の時代の技術メディアのうちに「集団的身体」を見て取っていたように、ハイパーテキストにおいて生じているのも、まさに技術とある種の集団的身体性の相互浸透である。技術は模倣的世界像を身体の外部に生み出してきた。これらの画像の断片が——まさに「脳空間」という技術性と身体性がメタファー的に結合する空間において——相互に結びつけられるとき、そこでは個々の身体性から生じた像が、いわば集団の身体像(イメージ)となって配置されていることになる。

今回の研究では、この研究の最終的な目標としてきた(3)の部分を中心に展開しつづけることができなかつた。当初、この研究目標については、とくにインターフェースの問題について、「身体性」という概念から考察を進める予定だったが、新たなインターフェース論の土台を準備するところで終わったことになる。

また、研究の過程で、当初特に予定していなかつた「集団的身体」という概念が、あらたに決定的に重要な概念として浮上してきた。今後の研究においては、このインターフェースをめぐる問題と、集団的身体の概念に集中的に取り組みたい。これらの問題は、今回取り上げたテーマ同様、多くの場合、純粋に技術的・実用的観点からとりあげられている技術メディア（とくに広義の「ハイパーテキスト」）を、人文研究的な視点から位置づけ、それによってこれらのメディアによってどのような文化的形態、人間の知覚・認識・思考のあり方が生み出されていくことになるかを考察するための、きわめて重要な足掛かりとなるからである。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計4件)

- ①山口裕之「〈視覚—触覚〉の言説とメディア理論(上)——ベンヤミンとマクルーハンの邂逅——」、『思想』(岩波書店) No. 1017、2009年第1号、pp. 6-23。
- ②山口裕之「〈視覚—触覚〉の言説とメディア理論(下)——ベンヤミンとマクルーハンの邂逅——」、『思想』(岩波書店) No. 1018、2009年第2号、pp. 76-98。
- ③山口裕之「ベンヤミンはハイパーテキスト

の夢を見るか あるいは、ハイパーテキストの触覚性」、『DER KEIM』(東京外国語大学大学院・ドイツ語学文学研究会) 2009年、第33巻、31-47頁、査読なし。

④山口裕之「ベンヤミンのシュルレアリスム——物たちの「シュルレアリスム的な顔つき」」、『思想』(岩波書店) 印刷中。

6. 研究組織

(1) 研究代表者

山口 裕之 (YAMAGUCHI Hiroyuki)

東京外国語大学大学院・総合国際学研究院・教授

研究者番号：40244628